



江淹「效阮公詩」について：その時代と文章制作の姿勢

著者	中野 将
雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	45
ページ	39-53
発行年	1987-06-27
URL	http://doi.org/10.15068/00149839

江淹「效阮公詩」について

——その時代と文章制作の姿勢——

はじめに

六朝時代の江淹（444—505）の詩作品は、さほど多いものとは言えない。多くはないその百首前後の作品から、「文選」は三十首の連作を採用しており、それが「雜體」すなわち模擬の作品であることには、何らかの意味（特に江淹の詩作の姿勢、或いは彼の詩才の性質とでも言うべきもの）が見出せるように思われる。さらに、彼がそうした傾向をもつに至った状況が背景としてあったことも見過すことができない。

そこで、この稿ではこれまであまり考察の対象とされていない江淹の初期の作と推定される連作、「阮公に效ふ詩」（效阮公詩）を中心として、作品にみられる主要な傾向、及びそうした傾向と連作であることとの関係、等を主に検討しながら、あわせて「效阮公詩」制作当時の彼をとりまく状況と時代、そしてそこにおける彼の才能の必然性とい

った点を考えてみたい。

中野 将

江淹の作品の多くは、その成立時期を確定することの困難なものである。内容から制作時期を推定する試みもなされているが、それも十分な説得力を持つとは言いが切れない。⁽¹⁾「效阮公詩」十五首もその中に含まれるものであるが、ただ一般的にこの作品は「自序」や彼の伝の言うところの「詩十五首」——彼が仕えていた建平王が宋王朝に対して事を起こそうと謀議を練っていたとき、それを知った江淹が王を諷諫するために作ったとされる——とこれまでみなされてきた。現在、この意見を積極的に肯定又は否定する資料はないが、この作品が江淹の他の詩作品と異質な点があるところから考え、この稿もこれまで通り、その時の作品として論を進めることにする。

題名についてであるが、「阮公」とは言うまでもなく三

国魏の阮籍（210—263）のことであり、「效」とは、この作品群が阮籍の「詠懷詩」を意識し、それを前提として作られたことを示している。⁽²⁾

ところで連作を検討する際に連作の各首がそれぞれ類似した傾向を有する場合、その全てを詳細に検討することはさほど有効とは言えないであろう。むしろその全体の特徴をよりよく備えた数首を検討し、他の作品に検証していくことの方が効果的であるのではないか。そうしたとき、連作におけるその重要性から言えば、第一首は無視し得ない。なぜならば、連作においては第一首がその連作全体の構造を示すことがままあるからであり、江淹がここで「效」う阮籍の「詠懷詩」もまたその一つとして挙げられるだろうからである。⁽³⁾ そうした観点から、ここで江淹の「效阮公詩」の第一首、そして阮籍の「詠懷詩」の第一首をそれぞれ挙げ、比較してみることとしたい。明らかに江淹の作品の第一首は阮籍のその第一首を強く意識していることが、見てとれるであろう。

效阮公詩 十五首 其一 江淹

歲暮懷感傷 歲暮 感傷を懷き
中夕弄清琴 中夕 清琴を弄ぶ
戾戾曙風急 戾戾たる曙風急ぎ

團團明月陰 团团たる明月陰る
孤雲出北山 孤雲 北山より出で
宿鳥驚東林 宿鳥 東林に驚く
誰謂人道廣 誰か謂ふ 人道広しと
憂慨自相尋 憂慨 自ら相い尋ぐに
寧知霜雪後 寧ぞ知らん 霜雪の後に
獨見松竹心 独り松竹の心を見はすを
次に阮籍の作品を挙げる。

詠懷 八十二首 其一 阮籍

夜中不能寐 夜中 寐ぬる能はず
起坐彈鳴琴 起き坐して鳴琴を弾ず
薄帷鑒明月 薄帷に明月の鑒り
清風吹我襟 清風 我が襟を吹く
孤鴻號外野 孤鴻は外野に号び
翔鳥鳴北林 翔鳥は北林に鳴く
徘徊將何見 徘徊して將た何を見ん
憂思獨傷心 憂思 独り心を傷ましむ

語彙の面からみても、両者の類似は明らかである。江淹は阮籍とほぼ同じ位置に、阮籍のものと似通った語を用いて、自己の作品を構成する。二句目の「弄清琴」と「彈鳴琴」（順序は前が江淹の語、後が阮籍の語。以下同）、三・

四句目の「曙風」「明月」と「明月」「清風」、五句目の「孤雲」と「孤鴻」、六句目「宿鳥」「東林」と「翔鳥」「北林」、八句目の「憂概」と「憂思」など、ほとんどそれは一首全体にわたって指摘できる。また、量の多少はあっても、同様のことが十五首全体にわたって指摘できる。

これだけ語彙が類似する二作品であれば、当然その作品の質も近似しているように考えられよう。まして、阮籍が自己の胸中を詠ずるのに対し、江淹は王の諷諫を意図するのであれば、さしせまった切実な状況は阮籍を凌ぐものがあるはずである。江淹の作は切迫し、緊張したものでなければならぬ。だが、全体を通観してみると、むしろ江淹の作の方が阮籍の詩ほどにさしせまったものは感じられない。そればかりか、穏やかにさえ感じられる。

これは次に述べるいくつかの点から説明されよう。第一に、江淹の作品が阮籍のものに比べ抽象化或いは普遍化の度合が低く、そのために説明的になってしまっている、ということが挙げられる。例えば阮籍の場合、ある「夜中」――それは過去から未来にわたり永遠に続くものであり、不特定の時間――であるのに対し、江淹は「歲暮」と限定した時期でしかない。そのことが詩世界を狭め、また江淹個人の主観を通過した特定の価値観に基づく判断によるもので

あれば、普遍性をもちにくい。その上、阮籍が「不能寐」と自己の状態を示すことでその苦衷を暗示するのに対し、江淹は「懷感傷」と言い切ってしまう。これも前に述べたことと同様のことが言え、それは同時に読者に説明しようとする態度だとも言えるだろう。これが更に明らかであるのは、七句目の「誰謂」、九句目の「寧知」であろう。阮籍の詩にはこうした他者を意識する姿勢はどこにもみられない。もちろん、江淹の作品が他者の諷諫を目的として作られたのであれば、こうした点は止むを得なかったのかもしれないが、しかしこうしたところが江淹の作品を阮籍詩の完成度の高みまで及ばせない、大きな原因となっていることも、また事実であろう。

第二に挙げられるのは、江淹の作には阮籍詩ほどに動きの幅のある詩語が使われていない、ということである。例えば江淹詩の六句目の「宿鳥」は、阮籍詩の「翔鳥⁽⁵⁾」と比べ、その動きの大きさの差は歴然としているし、江淹詩の五句目「孤雲」は阮籍の「孤鴻」に比べ、動きが緩慢である。そうしたことに加えて、二句目の「清琴」と「鳴琴」を比べれば、「清」が直接には「琴」という物質（或いは琴の音色）を形容するのに対し、「鳴」は鳴るという動的な、属性の形容であることも、この類に数えられよう。

さらに第三点として、江淹の作には擬態語が使われていることにより、全体の緊密感が損なわれていることも指摘しておかなければならない。三・四句目の擬態語は、確かに詩に古風な印象を与えるという利点がある反面、句のイメージの喚起力、及び詩句間の緊密性が減少し、この擬態語が、阮籍詩にみられる全体の緊密な構造を、江淹の作品から奪っていることは否定できない。

これまで述べてきたことが、江淹の作品から阮籍詩に感じられる一種の切迫感をぬぐいさる大きな原因であることは了解されよう。張玉穀が「古詩賞析」で「阮に效ふ詩は平直なること多く味少なし」と言うのは、印象批評ではあるが、まさにこうした点を的確にとらえた評言であるとなければならない。

ところで、江淹のこの詩を作る目的が王の諷諫にあるのであれば、十五首全体がそれなりの統一されたテーマのもとで制作されているはずである。そこで次に残りの十四首を含め、全体のテーマについてみていきたい。勿論、一首の中においても幾つかの問題を並立させる場合も多いが、そのときは最も江淹が眼目としているとみなされるものを挙げる。

二

第一首にみられる主要なテーマは正義の不変性であろう。霜雪の後に他と区別され現われる松や竹に、自身、或は建平王を比すこの第一首のテーマは、諷諫の目的にまこととにふさわしい。だが、全体からみるとこのように正義を積極的に称揚するものは少ない。むしろ人間の幸福が移り易いこと―人事不測・状況変化の必然―を繰り返して述べることで、王への間接的な諫めとして見るように見うけられる。その詩句を掲げれば次の通りである。

○性命有定理 禍福不可禁 (其十三)

○天命誰能見 人蹤信可疑 (其三)

○陰陽不可知 鬼神惟杳冥

：變化未有極 恍惚誰能精 (其五)

○不與風雨變 長共山川在

人道則不然 消散隨風改 (其九)

○寒暑有往來 功名安可留 (其九)

○寒暑更進退 金石有終始 (其十四)

○天道好盈缺 春華故秋凋 (其十五)

○富貴如浮雲 金玉不爲寶

一旦鵲鳩鳴 嚴霜被勁草 (其二)

主なものをごここにあげたが、これだけでも既に十五首全体の半数以上を占めていることに注意したい。これらの句

は「效阮公詩」が諷諫の意図をもって作られたのだということとを前提として、始めてそうした意味づけができるような間接的な表現である。すなわち、たとえ建平王が後廢帝を倒したところで、その盛運はいつかはきつと衰えるのだ、という運命觀にもとづく不確かなものでしかない。むしろここにもみることができるのは、江淹のこの表現が古詩に代表される「推移の悲哀」の系譜の延長線上にある、古來一般的にみられる運命觀なのではないだろうか。⁽⁶⁾そしてそれは、阮籍によって多少新しい詩史上の進歩の段階に入つただろう、その運命觀を確実に踏襲しているのである。それは単に語彙が似ているのみならず、その思想・内容が、例えば「富貴如浮雲 金玉不爲寶」(江淹・其二)、「春秋非有託 富貴焉常保」(阮籍・其四)のように明らかに共通していることから認められる。つまり、これらの表現からは、江淹の建平王を諷諫しようとする強い意志ではなく、阮籍の「詠懷詩」を継承しようとする姿勢のほうがはるかに強うかがえるのである。

そうした姿勢は単にこのこと―変化の必然―という点にのみ認められるのではない。阮籍の「詠懷詩」八十二首(五言詩)には、さまざまな彼の思考が多様な形をとって表白されるが、江淹の「效阮公詩」も、単にその一面をの

み模しているのではなく、その幾つかの形態を襲っている。例えば、阮籍の「詠懷詩」其五十九では「河上の丈人」と俗人とを比し、俗人を嫌惡する態度をみせるが、それは又、江淹が「效阮公詩」其十一でみせる姿勢と何ら相違はない。

詠懷詩 其五十九 阮籍

河上有丈人 河上に丈人有り

緯蕭棄明珠 蕭を緯^おり明珠を棄つ

甘彼藜藿食 彼の藜藿の食を甘しとし

樂是蓬蒿廬 是の蓬蒿の廬を樂しむ

豈效續紛子 豈に續紛の子に效ひて

良馬騁輕輿 良馬 輕輿を騁せんや

朝生衢路旁 朝に衢路の旁に生まれ

夕瘞橫術隅 夕に横術の隅に瘞^{やぶ}めらる

歡笑不終晏 歡笑 晏を終えざるに

俛仰復歎歎 俛仰 復た歎歎す

鑒茲二三老 茲の二三の者に鑒み

憤懣從此舒 憤懣 此れより舒ぶ

效阮公詩 其十一 江淹

擾擾當途子 擾擾たる当途の子

毀譽多埃塵 毀譽 埃塵多し

朝生與馬間 朝に與馬の間に生まれ

夕死衢路濱 夕に衢路の浜に死す

藜藿應見棄 藜藿 応に棄てらるべく

勢位乃爲親 勢位 乃ち親と爲る

華屋爭結綬 華屋 綬を結ばんと争い

朱門競彈巾 朱門 巾を弾かんと競ふ

徒羨草木利 徒らに草木の利を羨み

不愛金碧身 金碧の身を愛さず

至德所以貴 至德 貴ぶ所以なり

河上有丈人 河上に丈人有り

諸注の指摘する背景が阮籍詩にあるのかもしれないように、江淹も建平王と謀議を練る腹心の臣を暗に誹ろうと意図したものであるかもしれない。しかしいづれにせよ、二者が表わす態度は軌を一にするものである。

また、こうしたものの他に、江淹の神仙世界に対するあこがれ（例「願從丹丘駕 長弄華池滋」其四）、永遠の生活をいとなまぬ、いやしむべきものから自身を区別しようとする態度（例「豈與異鄉士 瑜瑕論淺深」其六）、などは、阮籍の「詠懷詩」の主要な一側面をなすものである。このことにもまして、孤独にうち沈む江淹がみる周囲の情景、

そしてそこから自己を解放せんがために試みる行動は、あまりにも阮籍にみられる特有の意識・行動の構造に酷似したものではないだろうか。それは、次の詩にみられる。

效阮公詩 其三 江淹

白露淹庭樹 白露 庭樹を淹ひ

秋風吹羅衣 秋風 羅衣を吹く

忠信主不合 忠信 主として合はず

辭意將訴誰 辭意 將に誰にか訴へんとする

獨坐東軒下 獨り坐す 東軒の下

鷄鳴夜已晞 鷄鳴いて夜已に晞ける

總駕命賓僕 總駕を総べることを賓僕に命じ

遵路起旋歸 遵路に遵ひ起ちて旋帰せん

天命誰能見 天命 誰か能く見ん

人蹤信可疑 人蹤 信に疑ふべし

詠懷詩 其十四 阮籍

開秋兆涼氣 開秋 涼氣を兆し

蟋蟀鳴床帷 蟋蟀 床帷に鳴く

感物懷殷憂 物に感じて殷憂を懷き

悄悄令心悲 悄悄として心をして悲しましむ

多言焉所告 多言 焉んぞ告ぐる所あらん

繁辭將訴誰 繁辭 將に誰にか訴へんとする

微風吹羅袂 微風 羅袂を吹き

明月耀清暉 明月 清暉を耀かす

晨鷄鳴高樹 晨鷄 高樹に鳴かば

命駕起旋歸 駕を命じて起ちて旋歸せん

このようにみると、江淹は單に阮籍の用いた詩語及び句をそのまま用いているばかりでなく、阮籍の作品にみられる思考形態とでも言うべき、その最も個人的であるはずの部分をも踏襲していることが認められよう。しかしそれが、必ずしも阮籍の詩を越える成功を収めるものでないこと、それは最初にそれぞれの第一首でみたのと同様である。

それではなぜ江淹はそうした姿勢をもって作品を作ったのだろうか。阮籍の詩との過度の類似は内容面での犠牲をはらわずにはいられないはずだが、それは少くとも諷諫を第一の目的とするべきこの作にはふさわしくないのではないだろうか。あまりに遊戲的であるが、「效」や「擬」という行為が詩語の並べ換えや内容の言い換えにあるのではないことは、陶淵明や鮑照の模擬詩を思いおこしても明らかである。これらの点から考えてみるに、江淹の意図が諷諫にあったとするよりむしろ、阮籍詩の柔順な模倣にこそあ

った、と見なすことのほうが妥当だと思われる。つまり、この「效阮公詩」には、江淹の詠懷性をみようとするよりは、技術的側面——いかに原詩の体裁に近くみせることができるか——を積極的にみていかなければならないと言える。そして、同様の傾向が江淹の代表作である模擬詩——「雜體詩」三十首——についても指摘されている。「雜體詩」に関して論究する幾つかの論文は、そのいずれもがここで述べた傾向——内容よりむしろその技術的側面に特質がみられる——の傍証となる同様の分析結果を提出している⁽¹⁰⁾。

江淹の作の多くを占める模擬詩に、いずれも同様の傾向が認められるのであれば、そこに何等かの理由が求められなければならない。或いは江淹は無意識にそうした結果を生み出したのだ、と考えられるかもしれない。しかし、これまでみてきたように江淹の模擬詩はあまりに偏った傾向を持ちすぎる。そうしたことのすべてを無意識の所産であると断定するのは、妥当性を欠くであろう。そこで、次に「效阮公詩」を制作する背景——当時の風潮や江淹の人生の最終的な理想、そしてそれを達成するためには彼はどのようなしなければならなかったのか——に眼を向けて、前記の疑問に対する答えを探ってゆきたい。

三

江淹が生まれたのは劉宋の元嘉二十一年（西暦444年）、當時文学はようやく貴族一般にも浸透し始めていた。裴子野の「雕蟲論」によれば、そうした傾向は宋の孝武帝の大明年間（457—464）頃から特に顕著になってきたことが知られるが、その大明年間は時あたかも江淹にとって十三歳から二十歳にあたり、人格形成に重要な意味をもつ青年期に、そうした文学隆盛期が重なったことは後の彼に大きく影響することになる。

このときの文学尊重の風潮は、時の帝の好尚に叶っているために、貴族全体をとり込み、容易なことで衰えようとしなかった。史書にも伝えられる文学愛好家の孝武帝は言うまでもなく、次の明帝（「好讀書」「愛文義」「宋書」本紀）、一方では文章家として評価もされる、齊の建国の祖、高帝蕭道成など、その後も帝はいずれも文学愛好者であった。社会の頂点に立つ専制君主が文学を好めば、下は皆それに靡くようになり、それが当時の文学の地位向上に大きくあずかっているのだろう。

こうした風潮の中で、文学が重視され、社会的にも認められるようになると、これまでとは別に一つの価値体系が生まれてくる。つまり、作品制作にはある程度の才能が要求される以上、家柄・家系重視の人物評価ではない、才能

本位の評価がなされるようになってくる。⁽¹⁴⁾それは、南齊の竟陵王蕭子良のいわゆる「八友」は王融のような名族出身者とともに、沈約・范雲らに代表される寒門出身者が多くを占めていたという有名な例によって証せられる。⁽¹⁵⁾

同じ貴族とは言っても、名族と寒門の間にはその待遇に雲泥の差があったこと、それは既に明らかであるが、少なくとも文学の名の下では、寒門出身者も貴族の人々に伍することができたのである。文学は寒門出身者にとって、一つの立身の方途として軽視し得ないものとなった。だが文才があれば無条件に世に顕れることができた、というわけではない。文学好きの有力者に認めてもらい、その庇護をまたなくてはならなかった。⁽¹⁶⁾

「南齊書」文学伝に一つの興味深い逸話が載せられている。

「宋の建平王景素が南徐州の刺史であったとき、觀法篇を作ったが、（王）智深がこれに和した作が賞せられて、西曹書佐に召された。が、智深は貧しくて着てゆく衣服がなく、建平王のもとに到る前に景素は敗れてしまった」

この王智深の話は極端な例だろうけれども、寒門文人が権力者の文章に和することで、自己の文才を認めてもらおうとする様子や、その生活状態などがうかがい知れて、興

味深いものがある。寒門文人は、自分を引き立ててくれる権力者に認めてもらい、そこで地歩を築き、それを足がかりにして中央へ雄躍しようとした。王智深は職に就く前に不幸にして建平王を失ったが、それでも後に丘巨源に認められて推薦され、齊の太祖に就いている。

当時の人々の意識の中でしだいに文学が大きな位置を占め始めたことを背景として、文学の才能を有することがそのまま社会的地位獲得の手段たり得ようとしていたこの時代、社会的にめぐまれない寒門出身者は自己に与えられた境遇から抜け出す方法を確実に一つ得たのである。とすれば、少しでも自己の文才を意識する寒門出身者は、切実なる思いで文学に自己の将来を託したであらうこと必定である。

濟陽考城を本貫とする江淹の家も、父が南沙令であることから知られるように、寒門であつた。⁽¹⁷⁾生活も、十三の歳に父を失つて決して裕福なものではない。そうした彼が、もし母の言う侍中にまで昇れるとすれば、⁽¹⁸⁾自己の文才を生かす以外にはなかった。まして文才に恵まれたことを自覚する彼のことである。時代を得て彼がいかに努力したか、伝記にはその文才について記さないものはないが、ここでは自ら、才能と努力とについて、誇らしげに述べる「自

序の文を引用しておく。

幼^{シテ}傳^ヘ家業^ヲ六歲^ニ能^ク屬^ク詩^ヲ長^ク遂^ニ博^ク覽^シ群書^ヲ不^レ事^ニ章句^ノ之^ヲ學^ニ頗^ル留^ル情^ヲ於^ニ文章^ニ所^ニ誦^シ詠^ス者^ハ蓋^シ二十萬言^ヲ生まれつきの素質に加え、こうした努力の結果、江淹のうわさは若い頃から広まった。後に齊の建元二年(480)、江淹が驃騎記室參軍となつたとき、史官として任をともにする檀超が、江淹が建平王に仕える以前に彼の才能を知り、礼をもつて遇してゐる。⁽¹⁹⁾

泰始二年(466)、始安王子真が十歳で死を賜うと、それまで仕えていた江淹を建平王が幕下に迎え入れる。建平王劉景素は、その父が宋の文帝の第七子劉宏であることからわかるように、皇族の一派である。当時、武帝の諸子は死んでおり、兵をあげ、事を起こして、人望の薄い後廢帝にかわるのに最も適した状況にあつた。⁽²⁰⁾そうした建平王から認めてもらえれば、江淹にとっては名を挙げるといふ機会となつただらう。彼は懸命に文章を作る。

だが建平王にとって江淹や王智深のような寒門文人を優遇することは、どのような意味をもつたのか。「宋書」の伝が手がかりとなる。

景素好^ミ文章書籍^ヲ招^キ集^メ才義之士^ヲ傾^キ身禮接^シ以^テ收^メ名譽^ヲ由^レ是^ニ朝野翕然^ニ莫^ク不^レ屬^シ意焉^ヲ

彼が有能な人物を登用したのは、「文章書籍」を好んだのにもまして、世の信望を集めんがための一つの方策でもあったのである。帝に手とどく位置にある彼が天下の信望を集めることは必須の要件であり、才士優遇は充分効果をあげた。そうした場合、名族出身者を採用するよりは、寒門出身者の方が宣伝効果は遙かに大きい。王智深もその極度の貧困がむしろ有利な条件となったのかもしれないし、江淹も彼に劣らず貧しかったのである。

建平王に対するこうした判断の正しさを傍証するものとして、次の逸話が挙げられる。江淹が建平王に仕えてまもなく、受金の疑いで投獄されたことがあった。だが上書すると即日にして許された、と。この話から読みとれるのは、建平王と江淹の純粹な信頼関係といったものではない。その上書は「文選」にも採られる名文ではあるが、自己の無罪を何ら論理的に証するものではなく、相手の感傷に訴えかけるものであって、この書により冤罪がはれるといった性質のものではないからである。その程度であれば何も投獄する要はない。ここは建平王側の一方的な世間受けを狙った意図こそ見られるべきである。麗わしき信頼関係の仮面の裏に、建平王は世間の眼に見られる自分を意識していた。挙兵に向けて着実に準備する彼にとってみれば、江淹の諫めは何の意味をも持たないばかりか、怒りを

さそうものでしかなかった。

一方の江淹にとってみれば、自己の才能を認めてくれた建平王に対する信頼は厚い⁽²⁾。さらに自己とは相容れない家臣と日夜謀議をなす王に、再び自分の存在を印象づけなければ忘れ去られてしまうだろう。だからこそ「效阮公詩」を作って王を諫めた。

二人のこうした意図の齟齬は、王の怒りを持った江淹の建安吳興令への左遷という形で終止符をうつ。「南史」の伝では、郡丞であつた江淹が太守の服喪にあたつて郡事代行を強く要求し、別の人物を立てようとしていた景素の怒りをつかたがため、とするが、そうであればなおさら江淹の意識と建平王の評価との間のくいちは明瞭である。江淹は自己の社会的地位を獲得するのにあまりに急であつた。しかし、ここに江淹の文才を武器として権力者に接近し、社会的地位を確保していこうとする姿勢ははっきりとうかがえる。

それでは江淹はこうしたこと——文才によって社会的地位を得ること——の果てに、何を求めていたのだろうか。単なる榮達だったのであろうか。それを知ることには、彼にとつての詩作の意味、そして社会的地位獲得の意味などを位置

づけるために必要なことである。江淹にとっては、いずれも最終的な目的のための単なる手段にすぎなかったのではないか。

四

「自序」の最後の部分には次のように言う。

…淹嘗云、人生當適性爲樂、安能精意苦力、求身後之名哉。故自少及長、未嘗著書、惟集十卷、謂如_レ此足_レ矣。…仕_レ所望_レ不過_レ諸卿二千石、有_レ耕織伏臘之資、則隱矣。常願幽居樂_レ宇、絕_レ棄人事、…待_レ姬三四、趙女數人、不_レ則逍遙_レ經_レ紀、彈_レ琴詠_レ詩、朝露幾間、忽忘_レ老之將_レ至。淹之所學、盡_レ此而已矣。

「南史」「梁書」の江淹伝にも同様の発言がみられる。

…天監元年、爲_レ散騎常侍、左衛將軍、封_レ臨沮縣伯。淹乃謂_レ子弟曰、吾本素宦、不_レ求_レ富貴、今之忝竊、遂_レ至於此。平生言_レ止足之事、亦以備_レ矣。人生行樂、須_レ富貴_レ何時。吾功名既立、正欲_レ歸_レ身草萊_レ耳。…

後者の発言は梁の武帝の天監元年（502）以降で、江淹の最晩年にあたり、「自序」執筆が自撰集編纂当時の齊の武帝の永明中期（～488）とすると、その姿勢が一貫していたことがうかがえるが、第一に共通するのは彼の人生安樂志向である。「自序」で「適性爲樂」、伝では「人生行樂」

と述べる態度、それは過度の富貴を嫌い、自己の分に安んずることで充分とするものである。すなわち必要な資産を官途で得れば隠逸生活に入る、それが彼の望みであった。

この「人生行樂」や「人生當適性爲樂」などから、江淹が快樂主義者であるとする見方があるが、それは正しくないだろう。それに続く後の文がいずれも隱者としての生活を言っていること、また江淹の語の典拠となるだろう楊惲の「孫會宗に報ずる書」の「人生行樂耳、須富貴何時」や潘岳の「閑居賦」にみえる「人生安樂、孰知其佗」が直接に田園での生活を指していることからそれは証せられる。この場合は「古詩十九首」等にもみられるデカダンの態度とは異なる。

彼の理想・人生の目的がこうしたものであれば、それまでの人生は全て過程にすぎず、理想を実現するための手段でしかない。江淹にとって文章制作はまさに「手段」に他ならなかった。「自序」に記す江淹の考え方で注目したいのは、「意を精にし苦だ力め」て「身後の名」を求める行為として文章制作がとらえられている点であり、あるいは彼の理想境において「彈琴」と同様の、風流の体現のための一行為として「詠詩」がとらえられている点である。

こうした考え方には、文章制作における最も基本的で、

最も重要なものが見失なわれている。すなわち「詠懷性」である。言うまでもなく江淹の作の全てがそうだと言うのではないが、彼にとって文章制作があくまで社会的地位獲得の手段でしかなければ、必然的に「詠懷性」は失なわれる。作品は当然他者の眼を意識したものにならざるを得ない。なぜなら、他者によって評価されることがその作品の全てとなるのであるから。そうしたとき、「模擬」という行為が、その目的に最も適した形態であることを江淹は実によく理解していた。

文章制作、特に基本的に個人的な営みである詩作が評価され、その才能が認められるためには、第一に作品が客観的基準に基づき評価されることが必要である。個人の好悪では普遍性は持ち得ず、そのため賛同が得たいからである。そのとき、個人的な詠懷の詩などは評価し難いものに挙げられよう。なぜならば、評価の基準がかなり印象的なものにならざる得ないからである。それに対し模擬詩はどうであろうか。模擬という行為は必然的に先行作品を意識することになるが、評価の際、今度は先行作品が比較対象となるが為に、いかに先行作品と近似しているか、ということが評価基準となり得る。たとえその評価が表面的だとの誹りを受けようとも、独創より技巧の方が一般に認め

易いものであることは、経験的にも明らかである。先行作品さえ知っていれば、それに似ているかいないかは誰にでもわかるのであるから。そして、その作品が如何に似ているのかという事で評価されるのであれば、採用した手法にこそ妙味があるのだから、一首二首では単なる遊戯として終わるものも、それが十五・三十と重なればそれなりの整合性をもち、価値を生ずる。だからこそ彼の模擬作は多くの首数を有する連作となり、「文選」もきわだって多くの彼の作を採録せざるを得なかったのである。²³

これまでみてきたことから、次のようなことが言えるのではないか。江淹の「效阮公詩」は、その素材からみて確かに諷諫の意図はあっただろうが、むしろ主要な意図は諷諫にあったのではなく、自己の才能を建平王に改めて認識してもらうところにあった。そのため、彼は模擬詩を多く作るが、それは自己の文才と権力者にしか頼るすべのない江淹のような寒門出身者にとっては、やむを得ないことでもあり、そうした模擬の才を伸ばすことこそ、時代の要求に叶っていたのである、と。

自分から離れてゆく建平王に、最後の望みを託したが、この「效阮公詩」十五首であったが、結果は江淹の期待とは逆に、彼は左遷され、王はその後に敗れてしまう。

六朝貴族制社会といわれる時代、ともすれば文学が遊戯に流れていこうとする中で、自己の理想実現の全ての可能性を文学に賭けようとした江淹の態度は、その切実さという点では「詠懷」の詩を作ることと同様のものとみたい。少なくともその生に密接な関係を持たない、貴族の「文學」とは異質なものであった。ただ、惜しむらくはその制作態度でこそ切実であっても、その内容が既制の価値に柔順でありすぎた。このあたりに江淹の文学の価値と限界があるのではないだろうか。宋の没落と齊の建国、その狭間にある、さまざまな人々の思惑をかかえた「效阮公詩」は、詩史の一時期を鮮やかに、そして確かに象徴しているのである。

注

- (1) 曹道衡「江淹作品写作年代考」艺文志 第三輯 一九八五年。
- (2) 陳沆は「詩比興箋」で「效古十五首」とし、そうしたテキストの存在をうかがわせる。
- (3) 大上正美「阮籍詠懷詩試論―表現構造にみる詩人の敗北性について―」漢文学会々報 第三十六号 一九七七年を参照。
- (4) 上段に江淹の詩句、下段にそれに対応する阮籍の詩句をあげる。

「顔華尙美好」其二「誰能常美好」其四

- 「飄飄恍惚中」其四「飄飄恍惚中」其十九
 - 「是非安所之」其五「榮名安所之」其十五
 - 「陰陽不可知」其五「陰陽有變化」其二十八
 - 「若木出海外」其六「若木羅西海」其二十八
 - 「鸞鳥相追尋」其六「豈可相追尋」其四十七
 - 「萬世更浮沉」其六「千歲再浮沉」其五十四
 - 「豈與異鄉士」其六「豈與鄉曲士」其四十三
 - 「夏后乘兩龍」其七「夏后乘靈輿」其二十一
 - 「昔余登大梁」其八「昔余遊大梁」其二十九
 - 「少年學擊劍」其十「少年學擊刺」其六十一
 - 「登城望山水」其十「登高望九州」其十七
 - 「蟪蛄號庭前」其十二「蟪蛄號中庭」其三十四
 - 「逍遙可永年」其十二「逍遙可終生」其三十四
 - 「北望高山岑」其十三「北望青山阿」其十三
 - 「感時多辛酸」其十三「感慨懷辛酸」其十三
 - 「性命有定理」其十三「性命有自然」其二十六
 - 「夕雲映西山」其十四「日夕望西山」其二十六
 - 「蟋蟀吟桑梓」其十四「蟋蟀鳴床帷」其十四
 - 「零露被百草」其十四「凝霜被野草」其三
 - 「秋風吹桃李」其十四「秋風吹飛蠶」其三
- ここには句全体が類似したものをあげるに止めた。その他にも語が類似したものはまだ数多くある。なお、後にとりあげる詩に関してはここではあげなかった。

(5) 李善注「文選」では「朝鳥」に作る。

(6) 吉川幸次朗「推移の悲哀—古詩十九首の主題」全集六を参照。

(7) 同右「阮籍の『詠懷詩』について」全集七を参照。

(8) 蔣師煥・陳祚明・曾國藩などの注。

(9) 注(2)前掲論文参照。

(10) 森博行「江淹『雜體詩』三十首について」中国文学報27一九七七年では「雜體詩」三十首を製作するに当って取った態度は、彼の内部から湧き起る押え難い彼自身の感興を文字に託そうとするものではなく、他人が作った詩を如何に巧妙に模倣し直すか、ということにあった」と述べ、その態度が賦や他の詩にも及ぶことを指摘する。又、衣川賢次「六朝模擬詩小考」中国文学報31一九八〇年の四、江淹「雜體詩」三十首では、潘岳の「悼亡詩」を中心に彼の詩句と江淹の「潘黃門述哀」とを詳細に比較した後に、「江淹の『述哀』の手法は、詩の下に掲げた典拠から明らかのように、殆どこの発想と詩句をそれら哀傷類から得て埋められていて、それは後世の集句の技法に近いとさえ言える」と述べる。

(11) 宋初迄于元嘉 多爲經史 大明之代 實好斯文 高才逸韻 頗謝前哲 波流相尚 滋有篤焉 自是閭閻少年 貴游總角 罔不損落六藝 吟詠情性 … 「雕蟲論」(「文苑英華」卷七百四十二)また、「南史」卷二十二王儉伝に「先是宋孝武好文章天下悉文采相尚 莫以專經爲業」とある。

(12) 孝武帝の後に廢帝が即位するが、在位は一年に満たないため實質的には明帝が孝武帝の次の帝と考えられる。また、明帝

の時代に關しては「雕蟲論」の序にも「宋明帝博學好文章 才思朗捷 每有禎祥 及幸燕集 輒陳詩展義 且以命朝臣 於是天下向風人自藻飾雕蟲之藝 盛於時矣」とある。

(13) 「南史」卷四齊本紀。

(14) 「貴族の洗煉された教養は才能ある人の文章をよく理解し、その点から寒門をも自己の同類にひきいれんとする意向を持つに至る」宮川尚志「六朝史研究 政治・社会篇」(第五章 魏晉及び南朝の寒門・寒人)

(15) 吉川忠夫「六朝精神史研究」(同朋舎)第七章 沈約の伝記と生活を参照。

(16) 森野繁夫「六朝詩の研究—集團の文学と個人の文学—」(第一学習社 第四章第二節 吳均P468)を参照。

(17) 前掲書「六朝史研究」P387に、「濟陽考城の江氏は全体として名族であり、各家として寒門である」と指摘されている。

(18) 「南史」卷五十九江淹伝に「初 淹年十三時 孤貧 常采薪以養母 會於樵所得貂蟬一具 將鬻以供養 其母曰『此故汝之休徵也 汝才行若此 豈長貧賤也 可留待得侍中著之』至是果如母言」とある。

(19) 「南史」江淹伝

(20) 「時太祖諸子盡殂 衆孫唯景素爲長 建安王休祐諸子並廢 徒 無在朝者 景素好文章書籍：由是朝野翫然 莫不層意焉。而後廢帝狂凶失道 内外皆謂景素宜當神器：」(「宋書」卷七十二劉宏附景素伝)

(21) 大上正美「江淹の挫折—建安吳興の令左遷をめぐる—」

東京工業高等専門学校研究報告書第六号 昭和49も「人事面の野心という低次元の史書の解釈を越え、この再三の建言の裏には江淹の王への深い思いのよせようが読みとれ、それはそれで王に託した江淹の「志」であったとみなさなければならない」とする。

(22) 江淹集はもともと自撰集であり（「凡所著述 自撰爲前後」江淹伝）、その編纂の際、自己の経歴を中心とした「自序」を著したと思われる。

(23) 「文選」が三十首もの連作を収録することは、それ自体特異なことであり、三十首という数は、陸機の「演連珠」五十首に次ぐものである。だがそれが連珠という特殊な文体に属するものであることを考えれば詩に關してはきわだつものといえる。

（筑波大附属高校）